

◆歴史には特殊なことばかり記録されているのかもしれない。

例えば日記を付けることを考えてみよう。現在ならブログの類でもよい。もちろん、過去の記録である日記は、歴史資料としてよく利用されるものである。基本的に毎日書くことがめざされるので、時系列的な追跡にも都合がよいのである。

ただそこで書かれるのは、本人にとって非常に「特殊なこと」ばかりだ。日記には、日々の暮らしの全てがそのままに表象されているのではなく、そのなかで珍しいと思ったことや、あまりいつもは思いつかない面白い気づきなどが書き残されるものである。

逆に、毎日繰り返される「あたりまえ」のことは書き残されない。いってみれば、朝起きて歯ブラシに歯磨き粉を載せ、歯を磨いたことよりも、歯を磨こうとして整髪料のクリームを歯ブラシに載せて歯を磨こうとしたことの方が書き残される。

そんなこと、「万が一のこと」である。けれども、私たちは、「毎日繰り返されること」よりもその「万が一のこと」の方を書き残す。そうすると日記というのは、日常そのものではなく、日常のなかで起こった特殊なことが書き残されていった記録だということが分かる。繰り返される「あたりまえ」の部分は、自然すぎて書かれない。

「毎日の記録」という意味でいえば、新聞も重要な社会史の資料とされる。「あたりまえ」に関していえば、よく言われるのは、「犬が人を噛んでもニュースにはならないが、人が犬に噛みつけばニュースになる」ということである。とすれば、新聞記事を社会史の資料に利用することなど、「人が犬に噛みつく」ような記録に基づいて社会の歴史を描いていることになる。

確かに犯罪史をある種の社会史として描くような試みもあった。犯罪には「人間」がよく表れており、社会史が語れるような気になる資料である。けれども、過去の犯罪を並べて社会の歴史を語れるように思えることの意味じたいを、もう少し考えるべきなのだろう。犯罪が社会を代表し表現しているというのだろうか。罪を犯した少年がいたとして、彼が彼の世代の代表と考える規準は、どのようなものなのだろうか。（そこで彼は「平均」や「典型」ではなく、いってみれば「極端な象徴」ということなのだろう。だが「極端な象徴」というよりも、社会史と全く関係のない「例外」であるということはないのか）

「あたりまえ」が忘れ去られてしまうことはまた、聞き取り調査の場でも起こる。

20年近く前、戦争体験の聞き取りに取り組んでいた頃、元兵士たちのある言い方が気になっていた。「ほらこれ、軍隊じゃあたりまえのことだったから（話さなかった）」という言い方である。

もちろん、聞き手である私の知識不足・勉強不足もあったかもしれない。けれども、私には十分に珍しく、それまで知らなかったようなことを、彼らは「軍隊ではあたりまえ」と考えて余り自分からは話そうとしなかった。特別なこと、壮絶なこと、悲惨の極致を自分の軍隊生活のなかを探し、語ろうとしてくれていたわけである。

彼らなりに「あたりまえ／珍しい」に関する規準が漠然と内面化されていて、それが戦争体験を語るさいの「言及する／しない」の規準にもなった。もちろん、「あたりまえ」のことはあまり語ろうとせず、なるべく「珍しいこと」を語ろうとするのである。無自覚にそうになっていたことも、あったかも知れない。

ただ、戦争体験に限らず、聞き取りの場では通常逆のことが問題になることが多い。それは、彼らが「語ろうとしない」「珍しいこと」を「いかに語らせるか」という課題である。オーラルヒストリーとして、文書資料に残らないような当事者だけが知る事実について証言して貰うことが重要だからである。「珍しいこと」には情報としての価値があり、「あたりまえのこと」には情報としての価値がない。

ただ私は歴史学者ではなく、社会学者だった。戦争体験が語られる「場」の構成のほうに興味があり、歴史学者のように、聞き取りで求める「情報」の種類を決めていなかった。（簡単にいえば、聞きたい内容をあらかじめ決めていなかった）だからこそ、むしろ「あたりまえ」を語ろうとしない彼らの語りの判断基準が気になったということである。

「軍隊では常識であること」が語られない結果、戦争体験の世代間継承ということでは、当時の万人が知っていた基本情報が逆に後世に伝わりにくくなるということもありうるわけである。例えば、作戦で出勤中は歯磨きができたのかということ——それは確かに本当に些末なことなのかもしれないが、であれば、いま例えば慰安婦の問題が議論されていることから、外地に進出した軍隊における自由時間や外出許可がどのようなものになっていたのかということ（例えば部隊長の裁量の有無なども含めて）など、かなりの専門家でなければ知らない事実だろう。（70年前までは、皆があたりまえのように知っていたことである）

これは戦争体験の例であるが、何かの過去の体験に関する語りには、一般にそういう傾向がある。その蓄積で歴史が出来ていくのだとすると、これはちょっと妙なことになるのではないか。皆が「あたりまえ」と思っていることを排除しながら語るのであれば、体験の語りとは、「あたりまえでないもの」の蓄積になることになる。

そうすると、私たちの歴史は、その時代の「あたりまえ」にあたる部分——人の営みにおいて巨大な部分だと思うのだが——を歴史に書かずに／書けずにいるということになりはしまいか。根本的すぎて忘れてしまうこともあるのではないかということだ。つまり気になるのは、「あたりまえ」すぎて我々の意識に昇らないようなもの、あるいは、様々な意味での「珍しいこと」「変わり者」の歴史ではなく、あたりまえであり、どこにでもいるが故に特に意識されず、見えなくなってしまうできごとや存在のことである。

もちろん、過去の「変わり者」＝少数者の存在が忘却にさらされているということも重要だろう。多数者の存在を中心にした歴史記述によって抑圧され、周縁化されてきた少数者についての歴史記述が、ある種彼らの「解放」に繋がったということもあるだろう。

けれども同時に考えなければならぬと思えるのは、「あたりまえ」を共有することで起こる、巨大な忘却である。それは歴史記述の中心で起こっているのではないか。これもま

た、歴史の体感のために考えなければならない重要な論点である。